

# 世俗と勝義との<sup>はざま</sup>間で

## 四津谷孝道

### I

ナーガールジュナ Nāgārjuna (AD. 150-250 年頃) の『中論』 *Mūlamadhya-maka-kārikā* には「真実は言葉によっては表現されない」と説かれているが<sup>1</sup>、その一方で「真実は言葉に依らずしては到れない。」とも明確に説かれている<sup>2</sup>。このような言葉と真実の関係は、中部經典 *Majjhima Nikāya* の蛇喩経 *Alagadūpamasuttaṃ* にある「筏」の喩えを連想させる<sup>3</sup>。彼岸に渡ってしまえば、捨て去られるべきである「筏」と同様に、人をして真実の世界に向かわしめる言葉も、その人が一旦彼岸、即ち真実の世界に到達すれば捨て去られるべきものなのである。しかし、此岸において人はその言葉を重ねることによって誤った認識を否定し、正しい認識を獲得する。そのようにして人は言葉を越えた世界、即ち真実の世界への道を模索してゆくのである。この道程は「言葉によって言葉を否定する営み」と表現されてよいであろう。たとえば、「声を出すな」と言って声が出すことを否定することがあるが、中観論者が「すべては空である」と言って全ての実在的な存在を否定することとそれが同じか否かという議論が『廻諍論』 *Vigrahavyāvartanī* にある<sup>4</sup>。ここではその議論に立ち入ることとはしないが、そこにおける「声を出すな」ということと「言葉によって言葉を否定すること」ということの両者は些か内容を異にするものなのである。というのは、前者において否定する「声」と否定される「声」は同じ性質を有するものと考えられるのであるが、後者において否定するものである「言葉」と、それによって否定されるところの「言葉」はそうではないからである。つまり、否定するものとしての「言葉」は、空・無自性の確信に裏付けされたものであり、一方否定されるものとしての「言葉」はなんらかの形で「実際に無いものを有る」(増益, *adhyāropa*, *samāropa*) と、或いは「実際には有るものを無い」(損減, *apavāda*) と誤って捉える無明 (*avidyā*) の影響下にあり、その両者は本質的に異なるものなのである。

ツォンカパ Tsong kha pa (1357-1419) は『菩提道次第論広本』 *Lam rim chen mo* で、以下に示されるように、我々が有するであろう三種類の知識に言及している。1) 「芽に自体によって成立する自性が有ると捉えること、即ち諦として有ると捉えること、2) 芽が自体によって成立することは無いけれども、幻のように有ると捉えること、即ち虚偽として有ると捉えること、3) そしてそれらが諦或いは虚偽のいずれによっても限定されないで、一般に唯有ると捉えることである」<sup>5</sup>。このように、ツォンカパは三種類の知識に言及しているが、それは以下のように理解できる。

- 1) 存在を実体的に捉える知（＝諦執）
- 2) 存在の「無自性」性を理解する知
- 3) 存在を考察することなく唯有るものとして認める知

これら三種類の知識には、それら各々に相応する三種類の言葉があると考えられる。「言葉によって言葉を否定する」という脈絡において否定するものとしての「言葉」は2) に相応するものであり、それによって否定される「言葉」は1) に相応するものである。つまり、「言葉によって言葉を否定する」ということは「無自性」性を理解する知の裏付けがある言葉によって、「諦執」より発せられた言葉或いは諦執そのものが否定されるということなのである。

「真実言葉によっては表現されない」というのは、言葉の世界即ち世俗世間の世界と勝義即ち真実の世界が隔絶されているということの意味する訳であるが、この二つの隔絶された世界が隔絶されたままであるならば、世俗世間にいる人々が真実の世界に至ることはあり得ないであろう。従って、そこにはなんらかの形で勝義の世界と世俗の世界が接点を持つことが必要と考えられ、そこにおいて言葉を越えた真実が言葉を通して表現されるべきなのである<sup>6</sup>。つまり、このような言葉こそが前述の「筏」のように究極的には捨て去られるべきではあっても、十分積極的な意味を持ち得るものなのである。

本稿では、世俗の世界と勝義の世界が言葉を通してどのように繋がれているかを中観派の論書の中に探っていくこととする。

## Ⅱ

勝義においては言葉やその背後にある観念を含めた分別は働かず、換言すれば勝義はそれら言葉や分別の対象となるものではない。それに関してナーガー

ルジュナは『中論』において「他によって知られず、寂靜であり、戲論によって戲論されず、分別を離れ、異なったものではないもの、これが真実の特徴である」と説いている<sup>7</sup>。『入中論』 *Madhyamakāvātāra* に対する自らの註釈書 *Madhyamakāvātāra-bhāṣya* において、チャンドラキールティ Candrakīrti (AD. 600-650年頃) は、勝義諦に關説する箇所『聖入二諦經』から以下のような一説を引用している。「デーヴァプトラよ、もし勝義として勝義諦なるものが身・口・意の対境であることを自性とするものであるならば、それは『勝義諦』と云われることとはならず、世俗諦となるであろう。けれども、デーヴァプトラよ、勝義としては勝義諦はあらゆる言説を越えたものであり、特徴がなく、不生、不滅であり、能言・所言、所知・能知と離れているものである。デーヴァプトラよ、勝義諦はあるゆる種類のものの中で最も優れたものを有する一切智者の智慧の対境の領域を [も] 越えるものである。たとえば『勝義諦である』ということ如き [さえも語られ] ないのである。すべての存在は偽りであり、[それらは] 虚偽なる存在である。デーヴァプトラよ、勝義諦は説かれえないのである。[では] それは何故なのか、と云うならば、[それは以下のようなものである。] 説く主体、内容、対象 (聴衆)、それらはすべて不生である。不生の諸々の存在によっては、不生の諸々の存在は説明されえないのである<sup>8</sup>。」(下線著者) ジュニャーニャガルバ Jñānagarbha は、『二諦分別論』 *Satyadvaya-vibhāṅga* でその勝義について「真実としては不二である。それ [に] は戲論が無いからである。文殊によって『真実とは [何か]』と問われて、勝者の子は何も説かれぬままだったのである。」(下線筆者)<sup>9</sup> と述べ、それに相応する經典、即ち『維摩詰説經』 *Vimāra-kīrti-nirdeśa-sūtra* の次の一節を引用している。「それから、マンジュシュリーがリッチャビ族の無垢なる者として有名な人 (=ヴィマーラキールティ) に以下のように語った。『良家の子よ、我々は各自の主張を説き終わった。そして、あなたも不二の法門をなんとか説いて下さい。リッチャビ族の無垢なる者として有名な人は何も説かれなかった。それからマンジュシュリーはリッチャビ族の無垢なる者に『[それは] 結構である』と付け加えられた。そして『良家の子よ、文字と語句と識が生じることが無いその人は菩薩の不二の法門に入るのである。』[それは] 大変結構である。』」(下線筆者)<sup>10</sup> これらの箇所に説かれているような「勝義」は「世俗」と全く対照的な性格を有するものと考えられる。たとえば、チャンド

ラキールティは『中論』の註釈書である『プラサンナパダー』 *Prasannapadā Mūlamadhyamakavṛtti* において前者を「不顛倒なもの」(aviparyāsa), 後者を「顛倒なもの」(viparyāsa) とし, その両者の関係を「顛倒なものと非顛倒なものは断ち切られている。」(bhinnau viparyāsaviparyāsau) と表現することによって, それらの隔絶性を指摘している<sup>11</sup>。更に, チャンドラキールティは『入中論』においてその隔絶性を「眼影を有する人」(=世俗の世界の人) が見る毛髪が「眼影を有さない人」(=勝義の世界の人) によっては全く認識されないことに喩えている<sup>12</sup>。また, カマラシーラ Kamalāīla (AD. 740-795年) は『中観光明論』 *Madhyamakāloka* において『聖二諦説経』を教証にして世俗と全く正反対なものとして勝義を位置づけている<sup>13</sup>。

### Ⅲ

前節で言及したような世俗とは隔絶されている勝義とは別の勝義がある。それは, 論証式をはじめとする言明における「勝義としては」(paramārthataḥ), 「真実としては」(tattvataḥ) 等のような限定句として用いられる場合の「勝義」である。この節においては, 自立論証と呼ばれる論証式においてこの種の勝義が, 二諦説を背景にどのような役割を果たすかについて考察してみよう。

「二諦説」とは世俗と勝義の世界をあり方を説明するものであり, それは世俗の世界から勝義の世界への道程を指し示すことを目的とするものである。そして, そのような目的の為に用いられる手段の一つとして「自立論証」がある。バーヴィヴェーカ Bhāviveka (AD. 500-570年頃) 自身が自らの論証式を意図的にそう呼んだか否かは別として<sup>14</sup>, 彼の論証式に対する「自立論証」(svatantrānumāna, svatantram anumānam) という呼称は, チャンドラキールティによるバーヴィヴェーカ批判の中に見い出せるのである<sup>15</sup>。そして, それは方法論的には対をなす「帰謬法」, 即ち所謂「プラサンガ論法」とは異なり, それは二諦説という枠組みを用いて諸々の事物が無自性であることを積極的に論証しようとする試みである。

前述のように, 世俗世間の世界と勝義即ち真実の世界が隔絶されたままであるならば, 世俗世間にいる人々が明確な意識をもって真実の世界に至ることはあり得ない。従って, そこではなんらかの形で世俗の世界と勝義の世界を繋ぐ, 言い換えれば両者が重複する領域が必要であるとバーヴィヴェーカは考え

たのであろう。バーヴィヴェーカは『中観心論』 *Madhyamaka-hṛdaya* において「真実 (=勝義) の高殿という頂きへ昇ることは正しい世俗の階梯がなければ可能ではない」(下線筆者) と述べている<sup>16</sup>。彼はこの「正しい世俗」(tathyasamvṛtti) の領域において「自立論証」と称される論証式を用いて積極的に世俗の世界から勝義の世界への道程を示そうとしたと考えられる。その論証式の特徴の一つが「勝義としては」という限定句を付されることにある。(この限定句に関してはIVにて後説)<sup>17</sup> チャンドラキールティがこのバーヴィヴェーカの論証式に関して批判を加えたことは夙に有名であるが、その論点の中心は「自立論証」を用いた場合「有法 (dharmin) 等の論証式の基本要素が対論者とバーヴィヴェーカとの間に共通に成立しない<sup>18</sup>。」ということである。その経緯は以下のようなものである。「勝義としては」という限定句が付された場合、バーヴィヴェーカ自身にそれら有法等が成立しえない。何故ならば、中観論者であるバーヴィヴェーカは勝義においていかなるものも認めることはないはずであるからである。ここで問題となるのは、「バーヴィヴェーカの『自立論証』における有法等はどの領域において設定されるものなのであろうか」ということなのである。バーヴィヴェーカ自身は上述のような批判、つまり自分自身にそれら有法等が成立しないという批判を予想して、自らの論証式の有法等が「言説において」(tha snyad du), 或いは「言説において一般に」(tha snyad du...spyir) 認められるものとすることによって、それを回避しようとしている<sup>19</sup>。一方、チャンドラキールティはバーヴィヴェーカの「自立論証」の有法等について異った理解を示している。チャンドラキールティは「自立論証」に関する次のような批判を述べる。バーヴィヴェーカ自身にとって論証式の有法は「仮設有」(prajñaptisat) 即ち「世俗有」であり、それは対論者 (=サーンキヤ学派) には不成立である。一方対論者にとってのそれは「実体有」(dravyasat) 即ち「勝義有」であり、それはバーヴィヴェーカには不成立なものである。このようにして両論者の間には共通な有法等は成立しえないという過失が生じるのである<sup>20</sup>。

その批判に対してバーヴィヴェーカが用意したとされる答えは、自らの論証式の有法等は「特徴 (或いは限定) を欠いたもの」(utśṛṣṭaviśeṣaṇam), 即ち「世俗或いは勝義等と限定されないもの」であるということである<sup>21</sup>。しかし、そのような有法等とは、「世俗と勝義のいずれの性質も有さないもの」と

も理解できるし、或いは「世俗と勝義の両方の性質を有するもの」とも理解できる。

以前に言及したバーヴィヴェーカ自身の見解や、自立論証派の流れを汲むとされるシャーンタラクシタ Śāntarakṣita (8世紀) の『中観莊嚴論』 *Madhyamakālamkāra* に述べられた見解を参考にすると<sup>22</sup>、自立論証の有法等は「勝義或いは世俗のいずれの性質も有するものとして限定されないで、あらゆる種類の人一賢者から婦女や凡夫に至まで一に共通に成立しているようなもの」と考えられる。

一方、チャンドラキールティが「世俗の世界と勝義の世界がまったく隔絶されたものである」、つまり「世俗と勝義が重複することはない。」と主張することによって「自立論証」の有法等が成立することを批判していることから考えれば、バーヴィヴェーカの「自立論証」の有法等は「世俗と勝義の両方の性質を有するもの」とも理解できる。事実、バーヴィヴェーカは世俗の世界と勝義の世界の折衷的領域を認め、それこそが限定句の中の「勝義」という語の意味するものであるとする<sup>23</sup>。これはバーヴィヴェーカが示した「勝義」という語に関する三つの語義解釈、即ち 1) 「勝れた対象」、2) 「勝れた知の対象」、3) 「勝義に相応するもの<sup>24</sup>」の中の 3) に該当するものである。ここにおいて、バーヴィヴェーカが中観論者である以上、彼が何らかのものを有法等と認めるとすれば、原則としてそれは世俗においてでしかない。但し、その世俗的なものの中でも、勝義に順じるもの (= 世俗と勝義の折衷的な領域において認められるもの) は勝義的な要素も含むことより、対論者である実在論者との間で共有することができ、それによって前述のような「有法等が対論者とバーヴィヴェーカとの間に共通に成立しない」という批判は回避されうるものであると考えられる。

また、自立論証などの正理による考察の結果としての「不生」等も勝義的なものであると所謂中観自立派 (Svātantrika-Mādhyamika, dBu ma rang rgyud pa) の人々によって理解されている<sup>25</sup>。たとえば、その一人であるジュニャーナガルバはその理由として、「世俗の真如こそが真実、勝義であり、その両者は別異なるものではない。」 (kun rdzob de bzhin nyid gang yin // de nyid dam pa'i don gyis bzhed // tha dad min phyr...//)<sup>26</sup> ということ述べている。表現そのものから見れば、この言明は明らかに以前に言及したチャンド

ラキールティの世俗と勝義の隔絶性に関する言明と極をなすものであることがわかる。

以上のことより、自立論証式の有法等が認められる領域は、世俗と勝義の両方の性質を有する、前述のバーヴィヴェーカの解釈における3)の勝義のそれでもありえるのである。更に、このような世俗と勝義の折衷的な領域に属するものは、換言すれば世俗と勝義の中間的な存在である。そしてそのような存在は、ツォンカパによって中観自立派が世俗と勝義の中間で認めるとされるところの「自性によって成立するもの」(=「自相によって成立するもの」,「自体によって成立するもの」)なのであろう<sup>27</sup>。そして、ツォンカパによって有法等が自相によって成立している論証式が「自立論証」であるとされる理由もそれなのであろうと考えられる<sup>28</sup>。

#### IV

前説で言及したように、確かにチャンドラキールティはバーヴィヴェーカの「勝義としては」という限定句を付することを一つの特徴とする自立論証に関して批判を加えている。しかし、チャンドラキールティ自身もそのような限定句の採用を単に否定しているとは考えられないのである。ツォンカパが「二諦説を説かない中観派はいない」<sup>29</sup>と述べているように、世俗の世界から勝義の世界への道程を指し示すことを目的とする二諦説を説く際に、チャンドラキールティでさえ何らかの形で勝義に閑説せざるをえないのである。つまり、そこにおいては「勝義的な考察」即ち「正理 (yukti, rigs [pa]) による考察」が行われなければならない、その意味において「勝義としては」等の限定句或はそれと同じ機能を有する表現が当然必要であると考えられる。そして、チャンドラキールティにおけるこのような限定句の機能が“vicāryamāne”という表現にあることはすでに指摘されている<sup>30</sup>。

確かにツォンカパは、ナーガールジュナそしてチャンドラキールティ等の所謂中観帰謬派 (Prāsaṅgika-Mādhyamika, dBu ma thal gyur ba) も限定句を用いていると指摘している<sup>31</sup>。では、その用法はバーヴィヴェーカの自立論証における限定句のそれと同じなのであろうか。「勝義としては」という限定句が付されて論証式等の言明をするということは、正理によって考察がなされるということである<sup>32</sup>。そのような場合でも、チャンドラキールティは「勝

義」の語義解釈において、バーヴィヴェーカのような「勝義に相応するもの」という解釈を認めないことより<sup>33</sup>、中観帰謬派自身が勝義的な有法等を認めることはないと考えられる<sup>34</sup>。より厳密に云えば、中観帰謬派は勝義的な存在を認める対論者を批判する際に、彼等との間で有法を共有することはないのである。従って対論者を批判することにおいて中観帰謬派に残された方法は、対論者の立ち場に沿ってその見解の自己撞着を指摘することしかないのである。その場合に、対論者の主張が否定されるだけなのか、或はその否定された内容が証明されるべきなのかが問題となる。前者は、チャンドラキールティが自らの投じる帰謬は対論者の主張を否定することだけを意図したものであると述べていることにも明確に表れていると考えられる<sup>35</sup>。又、後者は所謂プラサंगाの換質换位されたものが証明されたり、後代チベット仏教において、中観帰謬派にも自らの主張があると理解されたことに反映されていると推察できるのである。更に「正理」というものは、チャンドラキールティにおいてはあくまで世俗に属するものであるが、バーヴィヴェーカそしてジュニャーナガルバ等においては世俗と勝義の両方の性質を有するものであると考えられるのである。

## 註

<sup>1</sup> aparapratyayaṃ śāntaṃ prapañcair aprapañcitam /  
nirvikalpam anānārtham etat tattvasya lakṣaṇam // (MMK.18.9, p.25)

<sup>2</sup> vyavahāram anāśritya paramārtho na deśyate /  
paramārtham anāgamyā nirvāṇaṃ nādhigamyate // (MMK.24.10, p.35)

<sup>3</sup> MN. Vol.1, pp.130-142.

<sup>4</sup> syāt te buddhiḥ yathā nāma kaścīd brūyān mā śabdaṃ kārṣīr iti svayam eva śabdaṃ kuryāt tena ca śabdena tasya śabdasya vyāvartanaṃ kriyeta evam eva śūnyāḥ sarvabhāvā iti śūnyena vacanena sarvabhāvasvabhāvasya vyāvartanaṃ kriyeta iti / atra vyaṃ brūmaḥ / etad apy anupapannaṃ / kiṃ kāraṇam / satā hy atra śabdena bhaviṣyataḥ śabdasya pratiṣedhaḥ kriyate / na pīnar iha / bahvataḥ satā vacanena sarvabhāvasvabhāvapratiṣedhaḥ kriyate / tava hi matena vacanam apy asat sarvabhāvasvabhāvo 'py asan / tasmād ayaṃ mā śabdavad iti viṣamopanyāsaḥ (VVV, p.13)

<sup>5</sup> myu gu la rang gi ngo bos grub pa'i rang bzhin yod par 'dzin pa bden par yod par 'dzin pa dang / myu gu rang gi ngo bos grub pa med kyang sgyu ma ltar du



yod par 'dzin pa brdzun par yod par 'dzin pa dang bden brdzun de dag gang gis kyang khyad par du ma byas par spyir yod pa tsam zhig tu 'dzin pa'o (LRChen. pa.424a-3)

<sup>6</sup> たとえば、チャンドラキールティはその事を以下のように説明している。

kiṃ tu laukikaṃ vyavahāram anabhyupagamyā abhidhānābhideyajñāna-jneyādilakṣaṇam aśakya eva parmārtho deśayituṃ / (PMV, p.494)

<sup>7</sup> 註1) 参照

<sup>8</sup> lha'i bu gal te don dam par na don dam pa'i bden pa lus dang ngag dang yid kyi yul gyi rang bzhin du 'gyur na ni / don dam pa'i bden pa zhe bya ba'i grangs su mi 'gro ste kun rdzob kyi bden pa nyid du 'gyur ro // 'on kyang lha'i bu don dam par na don dam pa'i bden pa ni tha snyad thams cad las 'das pa / bye brag med pa ma skyes pa ma 'gags pa smra bar bya ba dang smra ba dang shes par bya ba dang shes pa dang bral ba'o // lha'i bu don dam pa'i bden pa ni rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa thams cad mkhyen pa nyid kyi ye shes kyi yul gyi bar las 'das pa yin te / ji ltar don dam pa'i bden pa'o zhes brjod pa ltar ni ma yin no // chos thams cad ni rdzun te bslu ba'i chos so // lha'i bu don dam pa'i bden pa ni bstan par mi nus so // de ci'i phyir zhe na / gang gis ston pa dang ci ston pa dang / gang la ston pa'i chos de dag thams cad ni don dam par rab tu ma skyes pa'o // rab tu ma skyes pa'i chos rnam kyis ni rab tu ma skyes pa'i chos rnam bshad par mi nus so // (MABh. p.110f)

<sup>9</sup> yang dag nyid du gnyis med de //  
de ni spros pa med pa yin //  
'jam dpal gyis ni yang dag dris //  
rgyal ba'i sras po mi gsung bzhugs // (SDV, k. 11, p.162)

<sup>10</sup> de nas 'jam dpal gzhon nur gyur pas / li tstsha bi dri ma med par grags pa la 'di skad ces smras so // rigs kyi bu bdag cag gis ni rang rang gi bstan pa bshad zin na / khyod kyang gnyis su med pa'i chos kyi sgo bstan pa spobs pa mdzod cig / li tstsha bi dri ma med par grags pa cang mi srma bar gyur to // de nas 'jam dpal gzhon nur gyur pas / li tstsha bi dri ma med par grgas pa la legs so zhes bya ba byin te / rigs kyi bu gang la yi ge dang skad dang / rnam par rig byed 'jug pa med pa de ni byang chub sems dpa' rnam kyis gnyis su med pa'i sgo la 'jug pa ste / legs so legs so.... (SDVV, p.162), 大鹿 [1980] p.75.

<sup>11</sup> PMV, p.30.

<sup>12</sup> rab rib kyi mthus rab rib can gyis rang gi lag na thogs pa'i bse ru la sogs pa'i snod kyi nang na skra shad la sogs pa'i 'tshogs yongs su 'gyur bzhin par mthong bas de bsal par 'dod nas snod de la yang dang yang du bsgre bzlog byed pa'i tshogs thob par rig ste / 'di ci byed pa zhig snyam nas rab rib med pas de'i gan

du phyin nas skra shad kyi yul der mig gtad kyang skra shad kyi rnam pa de dag  
ma dmigs shing / skra shad de'i brten can dngos po dang dngos med pa dang  
skra shad dang skra shad ma yin pa dang mthon ka la sogs pa'i khyad par dag  
tu rtog par byed yang ma yin no // yang gang gi tshe rab rib can rab rib can med  
pa la skra shad mthong ngo zhes rang gi bstam pa ston par byed pa de'i tshe de'i  
rnam par rtog pa bsal bar 'dod pas rab rib can gyi dmigs pa'i ngor byas nas 'di  
na skra shad dag yod pa ma yin no zhes dgag lhur byed pa'i tshig smra mod kyi /  
smra ba po 'di la de la skur 'debs pa yod pa ma yin no // (MABh, p.109f.)

<sup>13</sup> 'phags pa bden pa gnyis pa bstan pa las ji skad du / lha'i bu gzhan yang don dam  
par na don dam pa bden pa ni tha snyad thams cad las yang dag par 'das te /  
khyad par med pa/ma skyes pa / ma 'gags pa / brjod par bya ba dang / rjod pa  
dang / shes bya dang / shes pa dang bral ba'o zhes gsungs pa lta bu ste / 'di las  
ni shugs kyis shes bya dang / shes bya dang / rjod pa la sogs pa thams cad kun  
rdzob kyi bden pa kho na'o zhes nye bar bstan te / kun rdzob kyi bden pa ni don  
dam pa'i bden pa las bzlog pa'i ngo bo yin pa'i phyi ro // (MĀ.sa.231a2-3)

<sup>14</sup> 四津谷 [1999], pp.48-54.

<sup>15</sup> PMV, p.16 ; p.18 ; p.34, (“svatantraprayoga” : p.25)

<sup>16</sup> tattvaprāsādaśikharārohaṇaṃ na hi yujyate /  
tathyaśamvṛtisopānaṃ antareṇa yatas tataḥ // (MHK.3.12,p.270)

<sup>17</sup> 江島 [1980], p.102, Seyfort Ruegg [1981], p.65.

<sup>18</sup> 四津谷 [1999], p.97.

<sup>19</sup> gzhan dag na re / don dam par phyi dang nang gi skye mched rnam khas ma  
blangs pa'i phyir chos can ma grub pas gzhi ma grub pa'i phyir khyod gyi (kyi?)  
don ma grub pa nyid kyi skyon du 'gyur ro zhes zer ro // tha snyad du de'i gzhi  
bum pa dang mig la sogs pa skye mched rnam dang / gzhan nyid khas blangs  
pa'i phyir ji skad smras pa'i skyon mi 'thad pas de ni rigs pa ma yin no //  
(PRMV.tsha.50a4-5) (下線筆者)

yang grangs can gyi phyogs la brjod par bya ste / don dam par bdag ni zab mo  
ma yin te / the tshom can gyi shes pa la sogs pa'i rgyu yin pa'i phyir / dper na  
sdong du ma dang / bum pa bzhin no zhes brjod par bya'o // ci ste yang la la 'di  
snyam du dbu ma pas bdag gi tshig gi don nyid du khas blangs pa'i phyir de'i  
khyad par bstan pa mi rigs te / dper na mo gsham gyi bu'i sngo bsangs dang /  
dkar sham nyid la gogs pa bzhin no snyam du sems na / de ni bzhang po ma yin  
te / yang 'byung pa'i srid pa len pa'i phyir bdag ces bya ste / rnam par shes pa'i  
yul la bdag tu tha snyad gdags pa'i phyir rnam par shes pa la bdag tu brjod de /  
de ltar yang bcom ldan 'das kyis / sems dul ba ni dge ba ste / dul ba'i sems kyis  
bde ba 'thob // ces gsungs nas mdo sde gzhan las / bdag gi ngon ni bdag nyid

yi // gzhan ni mgon du su zhig 'gyur // mkhas pa bdag nyid legs dul bas // mtho ris dag kyang 'thob par 'gyur // zhes gsungs pas / de'i phyir tha snyad du bdag spyir khas blangs pa'i khyad par ma grags pa sel ba'i phyir skyon med do // (PRMV.tsha.18021-5) (下線筆者)

<sup>20</sup> ucyamāne 'pi parair dravyasatām eva cakṣurādīnām abhyupagamāt prajñaptisatām anabhyupagamāt parato 'siddhādhārah pakṣadoṣaḥ syād iti na yuktam etat // (PMV,p.28)

<sup>21</sup> tasmād yathātra dharmadharmisāmānyamātram eva grhyate / evam ihāpi dharminimātram utsrṣṭaviśeṣaṇaṃ grahīṣyata iti cet / (PMV,p.29)

<sup>22</sup> gzhung gis bskyed pa'i bye brag gis //  
 chos can spangs nas mkhas pa dang //  
 bud med byis pa'i bar dag la //  
 grags par gyur pa'i dngos rnams la //  
 bsgrub dang sgrub pa'i dngos po 'di //  
 ma lus yang dag 'jug par 'gyur //  
 de lta min na gzhi ma grub //  
 la sogs lan ni ji skad gdab /  
 bdag ni snang ba'i dang can gyi //  
 dngos po dgag par mi byed de //  
 de lta bas na sgrub pa dang //  
 bsgrub bya gzhag pa 'khrugs pa med //

rjes su dpag pa dang rjes su dpag par bya'i tha snyad thams cad ni phan tshun mi mthun pas grub pa'i mthus bskyed pa chos can tha dad yongs su btang ste / mkhas pa dang bud med dang byis pa'i bar gyi mig dang rna ba la sogs pa'i shes pa la snang ba'i ngang can gyi phyogs sgra la sogs pa'i chos can la brten nas 'jug go // de lta min na du ba dang / yod pa la sogs pa'i me dang mi rtag pa nyid la sogs pa bsgrub par 'dod pa thams cad kyi gtan tshigs kyi gzhi 'grub par mi 'gyur te / sgrub pa'i chos can yan lag can dang / nam mkha'i yon tan la sogs pa'i ngo bo rnams ma grub pa'i phyir ro // (MAV.sa.75a1-5)

<sup>23</sup> don dam pa ni rnam gnyis te / de la gcig ni mngon par 'du byed pa med par 'jug pa 'jig rten las 'das pa zag pa med pa spros pa med pa'o // gnyis pa ni mngon par 'du byed pa dang bcas par 'jug pa bsod nams dang ye shes kyi tshogs kyi rjes su mthun pa dag pa 'jig rten pa'i ye shes zhes bya ba spros pa dang bcas pa ste / 'dir de dam bcas pa'i khyad par nyid bzung bas nyes pa med do // (TJ.dza.60 b4-5)

<sup>24</sup> don dam par ni de don kyang yin la / dam pa yang yin pas don dam pa'am / rnam par mi rtag pa'i ye shes dam pa'i don yin pas / don dam pa ste / de kho na

(40)

世俗と勝義との間で (四津谷)

gzhan las shes pa ma yin pa la sogs pa'i mtshan nyid do // don dam pa nyid bden  
pa yin pas / don dam pa'i bden pa ste / de dus thams cad dang rnam pa thams  
cad du de bzhin du gnas pa'i phyir ro / rnam par mi rtog pa'i ye shes de'i yul can  
yang yul med pa'i tshul gyis don dam pa ste / de la don dam pa yod pa'i phyir  
ro // de 'gog pa dang rjes su mthun pa skye ba med pa la sogs pa bstan pa dang /  
thos pa dang / bsam pa dang / bsgoms pa las byung ba'i shes rab kyang don dam  
pa ste / don dam pa rtogs pa'i thabs kyi phyir phyin ci ma log pa'i phyir ro //  
(PRMV.tsha.228a3-5)

<sup>25</sup> skye ba med pa la sogs pa yang / yang dag pa'i kun rdzob tu gtogs pa yin du  
zin kyang /

dam pa'i don dang mthun pa'i phyir //

'di ni dam pa'i don zhes bya //

yang dag tu na spros pa yi //

tshogs rnam kun las de grol yin// (k. 70)

don dam pa ni dngos po dang dngos po med pa dang / skye ba mi skye bo dang /  
stong pa dang mi stong pa la sogs pa spros pa'i dra ba mtha' dag spangs pa'o //  
skye ba med pa la sogs pa ni de la 'jug pa dang mthun pa'i phyir don dam pa zhes  
nye bar 'dogs so // (MAV.sa.73a2-4)

<sup>26</sup> SDV, k. 17abc, p.173.

<sup>27</sup> dbu ma rang rgyud pa rnam bden pa sogs gsum du grub pa shes bya la mi srid  
par bzhed kyang / rang gi ngo bos grub pa sogs gsum ni tha snyad du yod par  
bzhed de /... (GR.ma.88a3)

<sup>28</sup> 四津谷 [1999], pp.69-71.

<sup>29</sup> mdor na dgag bya la don dam gyi khyad par spyor ba gtan mi 'dod na don dam  
par 'di dang 'di yin la kun rdzob tu 'di'o dang 'di'o zhes pa'i bden gnyis kyi rnam  
dbye byar med par 'gyur bas de 'dra ba'i dbu ma pa ni gang nas kyang ma bshad  
pas log par rtog pa kho na'o // (LRChen.pa.401b6-402a1)

<sup>30</sup> 江島 [1980] b.pp.168-173.

<sup>31</sup> LRChen.pa.399a4-404a5.

<sup>32</sup> rnam pa cig tu na don dam par med do zhes bya ba ni de kho na nyid kyis rnam  
par dpyad na med do zhes bya ba'i tha tshig go / (MĀ.sa.234a2-3)

<sup>33</sup> チャンドラキールティの「勝義」の語義解釈は以下のものである。

paramaścāsāvarthaśceti paramārthaḥ / tadeva satyaṃ parmārthasatyaṃ /  
(PMV,p.494)

<sup>34</sup> 但し、チャンドラキールティによれば中観論者が「不生」が論証される際には、  
単に「有法が生じること」のみが否定されるのではなく、有法そのものまでが否  
定されるとバーヴィヴェーカ自身が認めているとする。

yasmād yadaivotpādapraṭiṣṭho 'tra sādhyadharmo 'bhipretaḥ tadaiva dharmin-  
nas tadādhārasya viparyāsamātrāsāditātmabhāvasya pracyutiḥ svayam  
evānenāṅgīkṛtā // (PMV,p.30)

<sup>35</sup> tataśca parapratijñāpratiśedhamātraphalatvāt prsaṅgāpādanasya  
prasaṅgaviparītārthāpattiḥ (PMV,p.24) (下線筆者)

(略号表)

- D: sDe dGe ed. published by Sekai Seiten kanko Kai (世界聖典刊行会).  
GR: *dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dGongs pa rab gsal*, bKra shis  
lhung po ed. (*The Collected Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang  
grags pa*, vol.24), Delhi, 1979.  
LRChen: *Byang chub lam rim chen mo*, bKra shis lhung po ed. (*The Collected  
Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa*, vol.20), Delhi, 1979.  
MA: *Madhyamakāvatāra*. (→ MABh)  
MABh: *Madhyamakāvatāra-bhāṣya*, (de la Vallée Poussin [1970]a).  
MAV: *Madhyamakālamkāra-vṛtti*, D. ed. dBu ma. vol. 12. 1978, Tokyo.  
MĀ: *Madhyamakāṣloka*, D. ed. dBu ma. vol. 12. 1978, Tokyo.  
MHK: *Madhyamaka-hṛdaya-kārikā*, Ejima [1980].  
MMK: *Mūlamadhyamakakārikā*, (de Jong. [1977]).  
PMV: *Prasannapadā Mūlamadhyamaka-vṛtti*, (de la Vallée Poussin [1970]  
b).  
PRMV: *Prajñāpradīpa Mūlamadhyamaka-vṛtti*, D. ed. dBu ma. vol. 2. 1977,  
Tokyo.  
PTS: Pāli Text Society.  
RG: *dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad  
rigs pa'i rgya mtsho*, bKra shis lhung po ed. (*The Collected Works of  
rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa*, vol.23), Delhi, 1979.  
SDVK: *Satyadvaya-vibhaṅga*. (→ SDVV)  
SDVV: *Satyadvaya-vibhaṅga-vṛtti*, (Eckel [1985]).  
TJ: *Madhyamakahṛdaya-vṛtti-tarkajvālā*, D. ed. dBu ma, vol. 3. 1977.  
VVV: *Vigrahavyāvartanī-vṛtti*, (Bhattacharya / Johnston / Kunst [1978]).

(引用文献)

- Bhattacharya, Kamaleswar / E. H. Johnston / Arnord Kunst.  
1978 : *The Dialectical Method of Nāgārjuna (Vigrahavyāvartanī)*. *Translat-  
ed from the original Sanskrit with Introduction and Notes*. Reprint.  
Delhi : Motilal Banarsidass.

Eclél, Malcom David.

1985 : "Bhāvaviveka's Critique of Yogācāra Philosophy in Chapter XXV of the Prajñāpradīpa.", *Miscellanea Buddhica* (Indiske Studier, 5), pp. 22-75.

江島 恵教

1980a : 『中観思想の展開-Bhāvaviveka 研究-』, 春秋社, 東京.

1980b : 中観派における対論の意義—特にチャンドラキールティの場合—『仏教思想史』3, 平楽寺書店, 京都.

de Jong, Jan W.

1977 : *Mūlamadhyamakakārikā*. (Adyar Library Series, 109), Adyar Library and Research Centre, Madras.

一郷 正道

1985 : 『中観莊嚴論の研究』, 文栄堂, 京都.

梶山 雄一

1974 : "Bhāvaviveka and the Prāsaṅgika School." Nava-Nālandā-Mahāvihāra Research Publication, 7, pp.291-331.

松下 了宗

1984 : 「ジュニャーナガルヴァの二諦分別論」—和訳研究(上)—, 龍谷大学大学院紀要, 第5集, pp.27-49.

1985 : 「ジュニャーナガルヴァの二諦分別論」—和訳研究(下)—, 龍谷大学大学院紀要, 第6集, pp.27-53.

松本 史朗

1984 : 「Jñānagarbha の『世俗不生論批判』について」, 駒澤大学仏教学部論集, 第15号, pp.1-34.

1997 : 『チベット仏教哲学』, 大蔵出版, 東京.

長沢 実導

1978 : 『瑜伽行思想と密教の思想』, 大東出版社, 東京.

大鹿 実秋

1980 : *Vimālakīrti-nirdeśa*, Acta Orientaria, Narita.

Tauscher, Helmut.

1995 : *Die Lehre von der Zwei Wirklichkeiten in Tsong kha pas Madhyamaka-werken*, Wiener Studien Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 36, Arbeitskreis für tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.

Vallée Poussin, Louis de la.

1970a : *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*. (*Bibliotheca Buddhica*, 9), Osnabruck : Biblio Verlag. (reprint)

- 1970b : *Prasannapadā Mūlamadhyamaka-vṛtti*, ed. by de la Vallée Poussin, *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīri* (*Bibliotheca Buddhica*, 4), Osnabrück, Biblio Verlag. (reprint)
- 吉水 千鶴子
- 1992 : 「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (I)」, 成田山仏教研究所紀要, 15号, 仏教文化史論集 (II), pp.609-656.
- 1993a : 「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (II)」, 『インド学密教学研究 宮坂宥勝博士古稀記念論文集』(下巻) 所収, pp.971-990.
- 1993b : "On rang gi mtshan nyid kyis grub pa III, Introduction and Section I", 成田山仏教研究所紀要, 16号, pp.91-147.
- 1994 : "On rang gi mtshan nyid kyis grub pa III, section II and III", 成田山仏教研究所紀要, 17号, pp.295-354.
- 四津谷 孝道
- 1999: *The Critique of Svatantra Reasoning By Candrakīrti and Tsong-kha-pa—A study of philosophical proof according to two Prāsaṅgika Madhyamaka Traditions of India and Tibet*, Tibetan and Indo-Tibetan Studies 8, published by the Institute for the culture and history of India and Tibet at the University of Hamburg, Franz Steiner Verlag Stuttgart.